

四国大学デジタル創生館（仮称）等整備事業設計プロポーザル 審査結果

四国大学が新たにデジタル創生学部（仮称）を創設し、新学部棟の建設を進めるに際し、本学のガバナンス・コードを規範にして適切なガバナンスを確保し、時代の変化に対応した大学づくりのため、今回、初めて設計プロポーザルに取り組みました。

昨年、令和6年11月8日に公募を公表し、以降短い期間の中で4者の設計共同体の皆様から応募があり、一次審査を経てそれぞれ有益な技術提案を頂きました。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

今回の提案は、大変厳しいスケジュールのもと、そして建設費が高騰している状況の中で、持続可能な社会の実現や本学の進める学内整備に対応し、そして本学が100周年という大きな節目を迎えている状況の中で、いかに整備を進めるべきか、それら課題に対応する内容を求めたところです。

令和7年1月8日（水）に二次審査会を開催し、次のとおり最優秀賞及び優秀賞を決定しましたので、審査総評を添え報告いたします。

【審査総評】

まず、ご提案頂いた4案とも、それぞれ示唆に富んだ内容が含まれていましたが、その中でも審査上一番優先したのが、スケジュールの遵守という点です。通常の建替などとは違い、新しく学部を設置するための手続きが必要でタイトなスケジュールとなっており、スムーズな設計監理や工事進行のための対応力が求められています。

次に、2点目は、工事費の縮減です。もともとアリーナという大規模空間の設計を伴い、採用する構造によっても工事費に大きな振り幅がある構造物です。しかも、諸資材高騰の中での取り組みで、意思疎通が非常に重要と考えています。

そして、3点目は、持続可能な社会の実現に向けどう整備を進めるか、という点です。

こういった点から、一次審査を通過した4者の設計共同体に技術提案書の提出を求め、ヒアリングを実施し審査しました。

提出いただいた案は、大きく分けて、新学部棟とアリーナを分棟方式で渡り廊下によりつなぐ案が2提案、アリーナの上層階に学部を設置する案が1提案、東西に学部棟を設置しその間にアリーナを設ける案が1提案という状況でした。

これについては、学部の設置認可申請上、学部専属のスペース、大学全体で使用するスペースを明確に区分して面積や経費を積算する必要があるため、分かりやすい計画ほど対応がとりやすいという意見が出ました。また、工事を進める際にも、多少柔軟性を持つことが出来るため、分棟方式が対応しやすいのではとの指摘もなされたところです。

今回の提案で、特に「女性目線」については何を提案すべきかわかりにくかったという意見がありましたので、この点について例示して補足しておきます。

女性目線の取り組みについては、数年前NHKで取り上げられました。スウェーデンでは女性たちからの「雪の日には外出できない」「滑って転んでケガをする」という声に応え、冬場の除雪順を変更したとのことです。道路管理担当者や市議会議員たちと話し合い、車道優先から保育園や学校の周り、歩道や自転車道優先に切り替えたところ、女性が子育てをしながら生活がしやすくなったのみならず、副次的な効果として、転倒事故が大幅に減り、医療費の削減にもつながったそうです。このように、目線を少し変えるだけで、女性はもちろん社会全体にとっても良い結果をもたらすため、本学でも、ちょっとした気づきや工夫で改善できることに取り組んでいます。「女性目線」の真の目的は、単に女性受けすることを求めているのではないと言うことを申し添えておきます。

提案者におかれても、そのような観点で施設整備や維持管理などに着目し、今後ともご提案いただければと考えております。

そして、四国大学は100周年を迎えます。東側からのアクセス路の整備を受けて、現計画地はとても重要な位置になると考えています。また、旧吉野川橋からの眺望も見込まれ、いわば本学のこれからの顔の整備となり、次の世代への大きなアピールともなります。吉野川越しに眉山と対峙する、そんな徳島を象徴するロケーションにある四国大学で、新しい建物をランドマークとして活用しながら、徳島に笑顔と元気をもたらしてゆければと思います。

提案いただいた4案の評価は次のとおりです。

最優秀賞 受付番号Ⅱ-③

提出団体名：moon at. +NASCA設計共同体

代表者名： 株) moon at. 代表取締役 伊月 善彦

分棟方式で、大学提示案を東西逆にし、東側に新学部棟を配しており、新学部棟の1階についても、津波浸水深をクリアするため持ち上げ、7階建ての計画となっています。東側新アクセス路からの導入部にあたるため、学部棟を平行四辺形にし、アリーナとの接合部を台形状の開かれた空間とするなど、正面性の演出に配慮しており、竣工までのスケジュール管理において、施工者との技術協力の提案についても勘案されていました。この提案団体の構成員は、実際に県外私立大学での整備にも経験豊富であり、実施設計を進める場合には何かとノウハウの教示をいただけるものと期待されます。

議論になったのは、概算工事費の記載についてです。あまりにも高額が示されており、この金額では到底進めるのは不可能ですが、これについては、全国的な状況を加味して最大値を表示したとの説明があり、これを半減以下に向け努力してゆくとのことでした。この工事費提示については、金額を示していたのが当該チームだけであり、こういった審査案件でネガティブな情報も示しながら真摯に受け答えできるのは、かえって信頼できるのではないかと意見も出されたところです。

また、既存の情報メディア館（U館）との一体性については、新学部棟を東側に寄せたため、かえって距離が離れることとなりました。これについては、後年次の計画となるであろう回遊路の整備で魅力を上げるとの提案であり、それこそ学生目線・女性目線のみならず、教員も含めた目線での魅力の創造について、大いに期待するところです。

当案は、学生・教職員からも一定の支持を得ており、最優秀賞にふさわしいと判断し選出しました。

優秀賞 受付番号Ⅱ-①

提出団体名：(株) 平島弘之+TEAM28

代表者名：(株) 平島弘之+TEAM28 代表取締役 平島 弘之

当該提案も分棟方式です。この提案団体は、県内での小中学校での校舎・体育館などの経験も豊富であり、様々な状況に応じた提案も実践していることが窺い知れます。今回の提案内容も、大学側が示した内容から改良し、新学部棟とアリーナを明確に分離し、アベニューを挟んでこれまでの四国大学の歴史を未来に向かわせながら、短期間に取り組めるよう検討が重ねられ、工事発注支援を含めた実践的な提案であったと感じています。

ただ、残念ながら、提案書の絵を見る限り、特にアリーナ部が巨大な塊のように見えてしまい、説明を聞くまでガラス面の開口部などで明るい空間であるとは認識できず、そういったイメージになったとしたら、学生や教職員の支持が得られなかったことにつながったのかもしれないと感じたところです。

今回のプロポーザルは、私立大学として新学部の開設を伴う大きな節目での実施であり、相当綿密な資料整理が必要で、ノウハウや対応力があればあるほどありがたい状況です。そんな中であって、体育館を含めた学校施設について設計経験が豊富であることも評価し、僅差となりましたが、優秀賞として選出しました。

受付番号Ⅱ-②

提出団体名：阿波土着建築連合

代表者名：(株)橘建築事務所 代表取締役 森脇 康明

当該提案は、東西に学部棟を分け、真ん中にアリーナを配置するという斬新なアイデアでした。また南側のファサードもインパクト十分であり、開放感があり施設内外を緑に包み内装の木質化を進めるなど、先進性のある提案となっています。

しかし、質疑にも出ていましたが、植栽のための土量確保などイニシャルコストの問題や維持管理の考えについて未消化であったように感じています。例えば、レストランで出る食の残材を活用したコンポスト化や雨水利用によるメンテナンスの負担軽減など、太陽光発電による電力供給と共に、より踏み込んだランニングコストまでシミュレーションがあれば、もっと説得力があったのにと惜しまれます。

施設構成については、静寂を必要とする学部での授業と、にぎやかなアリーナ使用がほぼ同一空間となり、音や振動の問題をクリアするのは困難ではないかと思われました。また、学部棟の廊下部分がアリーナの観客席を兼ねるということについて、申請上、専用部分と共用部分をどのように整理するのか、相当の難題であると感じます。

一方で、この提案は、学生や教職員から多数の支持が得られた計画でした。今後整備を進めるなかで、共感を得られた部分を分析し可能なものは活かしたいと考えています。

受付番号Ⅱ-④

提出団体名：MATSUDA Kimihiko Studio Inc.

代表者名：MATSUDA Kimihiko Studio Inc. 代表取締役 松田 公彦

当該提案は、アリーナの上層階に学部棟を設置する提案です。なかなかシンプルにわかりやすくまとまっており、プランニングそのものの評価は悪くありませんでした。「纏う(MATOU)」のキーフレーズで、地域との交流を意識し、大空間を活用したラーニングコモンズなど、現在の四国大学にはない斬新性も見取れます。

ただ、残念ながら、困難なのは十分承知していますが、スケジュール遵守への意気込みや工事費縮減への見解について、聞いていて安心感が得られるものではなかった点が惜しまれます。また、音や振動といった点についても、個室には遮音対策を講じるとはなっているものの、コスト的にはどうなのか一定の懸念があります。

建物の顔の部分については、東側新アクセス路からは新しい玄関口となるので、建物の東南部に視線が行きます。また、吉野川からの眺望も重要であり、外から大学を見る際どのように映えるか、のみならず、大学から吉野川越しに眉山を眺める、双方向の視点が重要となってきます。整備に向けては、ご提案に加え、外部空間の作り方や自然環境との調和などにより、学生たちにも温かみを感じられ心地良い学園づくりとなるよう配慮が必要と感じます。

以上です。ご参加頂きました提案者のみならず、ご協力頂きました全ての方に感謝申し上げます。結果発表といたします。ありがとうございました。

令和7年1月16日

四国大学デジタル創生館（仮称）等整備事業設計プロポーザル
二次審査委員会審査委員長（四国大学学長） 松重 和美